

## 発達障害。ピンチサーバー



三 重 県

川 かわ  
北 きた  
弘 ひろ  
美 み

中学生になった息子、隆広は、部活動をするのと張りきっていた。隆広には、知的能力も身体能力にも発達の遅れがあった。

隆広は、手先を使うことが、とても苦手であった。中学生になっても、靴の紐ひもがむすべなかった。名札も、安全ピンをまっすぐにつけることができないほど不器用だった。

小学校で習う漢字は、ほとんど読めない、書けない。エンピツをにぎる力が弱く、しっかりした字が書けないので、なんと書いてあるのかいっこうにわからなかった。カタカナさえ、読めないし、書

けない字のほうが多かった。

自分の名前はなんとか書けるが、住所は書けないし、読めなかった。

地元の公立中学校に、新一年生として入学したが、能力としては、小学校の二年生程度であった。

小学生が、中学生に混じって部活動を行うのである。何部にはいつても、苦勞することは目にみえていた。できることなら、三年間、部活動を続けて欲しかったが、むずかしいだろうと思っていた。

スポーツの部を選んだ場合は、小学校のときのように、みんなで仲良く行う遊びのスポーツではない。レギュラーを争い、ポジションを争っていかなければならない。試合では、勝ち負けも問題になる。

中学生になれば、障害をもつ者に対しての、差別の気配も生まれてくるだろう。隆広にできる部活はなにかと、中学に入学してからの数日間、いっしょに考えた。

さて、部活見学の時期も過ぎて、正式に何部にはいるかを決めるとき

「ぼく、バレー部にはいる」

と、事もなげに、隆広はいった。

私は

「ゲッ」

といったきり、しばらく言葉がでなかった。

よりによって、バレーボール部を選ぶとは思ってもいかなかった。ジャンプ力や反射神経など、ないに等しい隆広である。続くはずがない。続く、続かないよりも、他のバレー部員のじやまになってはいけない。私は、あわてて思いとどまらせようとした。

「隆広、あんた、バレーってどんなスポーツか知ってるの？」

「知らん」

「知らんのに、なんでそんな部にはいるの！」

「先生が、バレー部を見学にこいつていうたんやもん。見学にいったら、キャプテンがやさしいんやもん」

「キャプテンがやさしいから、バレー部にはいるんか？　もうちょっと考えてから、部を選んだらどうや。先生も、あんただけに見学にこいつていうたんとちがうやろ。みんなに、いうてるんやろ」

「ええやんか」

「あんたに、バレーは無理や。他の部にしとき」

「何で？　できるかもしれへんやんか」

まったく、能天気な息子である。隆広は、正式にバレー部に入部した。

隆広のはいったバレー部は、部員が三年生のキャプテンひとりという、廃部寸前の部だった。そして、まずいことに、担任の先生が顧問だった。

顧問先生は、バレー部を廃部にしたくないがために、新入学の一年生に「バレー部にこい」と声をかけまくっていたのだろう。先生にとつては、部員さえ集まればそれでいいのであつて、隆広など欲しいわけではないのだ。それを、自分を誘つてくれていると、隆広は思いこんだ。まったくの勘違いである。

そういうわけで、隆広の中学生生活は、支援教室で小学校課程の内容を勉強しながら、放課後はバレーボール、ということではじまつた。

勉強のほうには、いっこうに身がはいらないようであつたが、バレー部のほうは休むことはなかつた。授業が始まる前の、朝の練習にも、遅れないようにいつた。しかし、まだ、このときには、バレーボールなど長くは続かないだろうと思つていた。

雨の匂いのする六月の中頃に、一年生にとつては最初の、三年生のキャプテンにとつては最後の試合があつた。

ウォーミングアップをするバレー部員は、キャプテンの他に、新入部の一年生が十一人いた。

隆広は、と見ていると、みんながダッシュしているのに、いっこうにかまわず、マイペースで、ポツテ、ポツテと走っている。馬跳びはうまく飛ばずに、馬役の子にまたがってしまう。柔軟体操はやりかたがわからず、となりの子をぼんやりとみていた。

ボールを、いったんおでこの前でキャッチして投げ返すボールキャッチでは、隆広の投げたボール

は相手までとどかなかった。

やっぱり、他の部員の練習のじゃまをしているとしか見えない。

キャプテンと、五人の一年生でつくったチームは、ひとりだけがバレーボールの経験者である。ひとりだけががんばる試合では、勝てるはずもない。

一セットを簡単にとられ、二セット目も大差で負けているとき、顧問先生は、なにを思ったか、隆広をピンチサーバーにつかった。

ボールをもち、構える隆広をみて、空振りしないように、とだけ願った。隆広の打ったアンダーサーブは、やはり、相手のコートまでとどかなかった。

この試合を最後に、キャプテンが引退して、一年生だけのチームになった。この日から、隆広の、ピンチサーバーとしての日々がはじまった。

私とはいえば、バレー部の試合のたびに顔をみせる、追っかけおばさんになった。当然、隆広が、どうしているかを見たいがためであった。

バレーボールに興味などなかったし、バレー部が勝っても負けても、どうでもよかった。それが、試合のたびに観戦にいらっていると、しだいにバレー部の部員たちと顔なじみになり、名前も覚えてしまう。いつしか、バレー部のファンのような気持ちになって、応援していた。

夏休みになっても、毎日、練習があった。隆広は、なにもいわずに練習にかよう。なにしろ、隆広

のようすをみていたい私は、夏休みの練習を、一度、見学にいった。

バレー部員たちは、一列に並んで、顧問先生の打ちだすボールをレシーブしていた。隆広も低く構えてボールをまつ。構え方がややぎこちない。顧問先生の打ったボールは、隆広の腕をはじいて、顔にあたった。

私は、隆広が部活中に泣きだしたりして、顧問先生や部員のみんなに迷惑をかけることを恐れていた。恐れていたことが、目の前で起こっている。隆広は泣いていた。

「泣くな！」

顧問先生に一喝されると腕でグイッと涙をふいて、また列の最後についた。

練習をやめる気配のない隆広に驚いた。そんなに、粘り強い子ではないはずだ。できないことは、すぐにあきらめて投げだしていた子が練習を続けた。一喝されたりすると、まわりのことなど気にせず、よけいにビービー泣きだす子だったのに。なにこともなかったように、練習は進む。

やさしいバレー部の仲間たちは、隆広をじゃまにすることもなく、知らんふりをしてくれている。顧問先生も、隆広を、障害があるからといって、特別視することもなく、みんなと同じように練習をさせている。何回やらせてもできないことでも、ていねいに教えてくれている。

隆広は、みんな真剣に練習している、自分もそのなかにいる、そんなことを敏感に感じとっているのだろうか。自分が泣いて、練習の妨げになってはいけない、と考えることができるようになったの

だろうか。

とにかく、どこでもここでも、いやなことがあれば泣いていた隆広が、涙を拭いてバレエの練習を続けるということを学んだことは確かだった。バレエボールと、顧問先生と、バレエ部の仲間たちが教えてくれたことなのだろう。

隆広は、不器用で指の力も弱い。バレエボールをしていると、なにかのケガはあると思っていた。ケガの心配は、隆広だけではなく、スポーツをしているかぎり、だれにでもあることであろう。

一年生の二学期が始まったぐらいのときであっただろうか。仕事から帰ると、家に隆広がいる。まだ、部活中の時間のはずだった。

「あんた、部活は？」

「突き指したから帰ってきた。保健室で湿布してもらったけど、病院へいったほうがいいって」  
保健室でももらった湿布をはがしてみると、小指が紫色にはれている。聞けば、朝練で突き指したという。

近くの整形外科につれていき、レントゲンをとってもらおうと、小指は折れていた。

「小指、折れているのに、一日、がまんしてたんか。泣かへんかったんか」

「うん、突き指やと思うってたもん」

あくる日、朝練にはいかないだろうと、起こさずにいたら、自分で起きてきた。

「今日も、朝練あるねんで」

「指、折れてるのに、練習できへんやろ」

「みんなの練習みてるもん」

と、さっさと家をでていった。見学するだけでも参加したいほど、隆広が好きになったバレー部に感謝した。

中学生ぐらいの子たちの成長は早い。新しいことを始めても、すぐに上達していく時期だ。バレー部員たちも、目を見張るような上達ぶりをみせた。ただし、隆広をのぞいてだが。

あの六月の最初の試合では、試合にもならなかったのに、つぎの試合では、ボールを追いかける姿がさまになっていた。また、つぎの試合では、ラリーができるまでになっていた。

バレー部員たちは、試合のたびに、できることが増えていた。レギュラー陣のポジションも固まりつつあった。隆広以外の部員は、みんなフローターサーブができるようになっていた。ジャンプサーブを打ってみせる部員もいた。

隆広だけは上達することもなく、いつまでもアンダーからのサーブを打っていた。レシーブすると、ボールはどこへいくかわからない。トスは上がらなかった。

バレー部員たちが、二年生になったところのことだ。相変わらず、バレー部の練習は休むことのない隆広にいつてみた。



「隆広、あんたも毎日練習してるんやから、レギュラーになりたいとか、あの子より上手になりたいとか思わへんのか」

「ぼくは、レギュラーは無理やもん。ピンチサーバーでいく」

と、隆広は、ほほ笑んでみせた。

そのころからだ、試合をみにいくと、なんだか隆広が遠慮しているのだ。試合前のサーブ練習では、自分は打たずに球ひろいをしている。

「隆広、おまえも打てよ」

顧問先生の声が飛ぶ。

すると、やっと、サーブの練習を شدした。やはり、隆広の身体能力の低さでは、チームにとけこむことができないのかと心配になった。

朝は、朝練にいくために、早く起きてくるのだが、なんだかグズグズと家をでていかない。そんな日が続いた。

「隆広、どうしたんや。学校へいきたくないのか。部活がいやなんか？」

「なんでもない」

と、いいながら、隆広の目が赤くなり、涙が盛りあがった。

「なんでもないことないやろ。いうてみ」

「蹴<sup>け</sup>られるねん」

「だれに、蹴られるねん？」

「部室で、着がえているときとかに、急に蹴ってくる。でも、先生にはいわんといて。仕返しされる。もう、バレー部やめる」

おなじバレー部のひとりに、部室で蹴られていたのだ。隆広が、蹴り返してることがないとかかっていて、面白半分に蹴っているのだろう。何回も、蹴られたらしい。それを、がまんしていたのだった。

「先生にいわへんかったら、ずっと蹴られるで。バレー部をやめても、ほかのところでも蹴られるで。なつ、先生にお話しして、力をかしてもらおう。もう、蹴られへんようにしよう」

隆広は、しぶしぶうなずいた。

このことを、顧問先生にお話しすると

「隆広だけの問題ではありません。バレー部全体の問題ですから」と、いつてくださった。そして、ご尽力をいただいたのだろう。

隆広は、また、うれしそうに練習に行くようになった。

「先生が、みんなに話ししてくれた。もう、蹴られへんようになった。ぼく、バレー部やめへん、がんばる。ぼくには、バレーしかできへんもん」

弱虫の泣き虫が、そういった。

バレー部からも逃げだしたくなるほどつらかったことが解決して、すっきりしたのだろうか。

蹴っていた子のことや、その後のことを聞くといやがった。蹴られていたのに、その子を悪くいうことはなかった。

だいたい、隆広が人のことを悪くいうことはない。それよりも、だれそれはアタックができるようになった、だれのトスは高く上がる、と、憧れをこめて、ほめることしかいわない。

能力の低さを笑われても、笑った子を悪くいうこともない。初めからあきらめているのか、人を押しつけてなどという気はさらさらない。

おめでたいやつだと歯がゆくなるときもあるが、人に敵意をもたないことは、長所ともいえるのだろう。

そして、今回のことで、あらためて、自分にはバレーボールしかないと確信したようだ。

「ぼく、アンダーサーブは封印したんや。フローターサーブの練習してんねん。もうすぐ、できるようになる」

と、いって、フローターサーブを打つまねをした。

「そうかあ、あんたは、ピンチサーバーやからな。だれよりも、いいサーブを打てるようになってな」  
「でも、まだまだや」

「練習したら、すごいのが打てるようになるよ。ピンチサーバーっていうのは、サーブでピンチを救わなあかんねんで。ピンチを、つくってたらあかんねんで」

「わかってるわ」

「ほかの子が、十本、サーブ練習するんやったら、隆広は、百本打ったらええ。百本であかんかったら、二百本打ったらええねん」

ほんとうに、他の子の倍は練習しなければ、フローターサーブは打てないだろう。もしかしたら、三倍練習しても、打てないかもしれない。

打てるようになるまで、あきらめずに練習して欲しい。人の倍、練習してフローターサーブが打てるようになったときには、人の倍、うれしいだろうから。

ある練習試合でのことだ。隆広が、ピンチサーバーとしてでてきた。当然、アンダーからのサーブを打つものと思っていると、みごとにフローターサーブを打った。おまけに、相手のミスをさそい、一点を取ってしまった。いつのまにか、フローターサーブができるようになっていたのだ。

顧問先生はそのまま隆広をコートにのこした。そして、怒鳴る。

「逃げるなよ、隆広！ 逃げるな」

——どんな強いボールがきても逃げるな、拾え。どんなつらいことがあっても逃げるな、立ち向かえ。

と、顧問先生が、いつているように聞こえた。

弱虫の泣き虫が、蹴られても、バレエ部からさつさと逃げようとはしなかったのは、逃げないというのを、バレエボールをつうじて、体で教わったからだっただろうか。

成長ざかりのバレエ部員たちは、背丈もぐんぐん伸ばしていく。隆広も、いつもまにか私の背丈を超えた。

声変わりして、鼻の下には、産毛を濃くしたようなヒゲが生えてきた。

「隆広、そのヒゲ、剃りそ」

「イヤや、先生みたいにしたいから」

バレエ部で、いつも怒鳴っている顧問先生にはヒゲがある。

「なんでや、薄汚いで。剃ってしまい」

「イヤ」

頑かたくなに、剃ろうとはしない。

顧問先生のヒゲにあこがれて、ヒゲを剃らないのもまあいいか、と、そのままにしてある。

あこがれるほどの人が顧問をする部にはいったのも、幸せなことのひとつだろう。産毛のようなヒゲが、顧問先生のような立派なヒゲになるには、あと十年はかかるだろうけれど。

バレエ部など、長くは続かないという予感、はずれてしまったようだ。隆広は、三年生になって

もバレーボールを続けていた。後輩もできて「隆広先輩」と呼ばれるようになった。それが、とてもうれしいようだ。

隆広は、先輩なのに、なんの頼りがいもない。後輩の後ろからついてまわり、まどわりついている。障害児というのは、自分にやさしい人と、自分に敵意をもっている人を、すぐに見分けることができるようだ。後輩たちは、みんな、隆広にやさしくしてくれる人たちなのだろう。

隆広は、後輩たちのほうがバレーボールが上手ならば、素直に認める。よろこんで、褒める。自分のほうが、うまくなりたいとかの競争心はないようだ。それも、気持ちのやさしさの表れだとすれば、向上心のなさという欠点は消えてしまう。

同級生に対しては、障害児ゆえの遠慮のようなものを感じることもあるが、後輩たちの前ではじつに和やかだった。

三年生になったレギュラー陣は、オープンからのアタックだけではなく、クイックなどもできるようになった。あいかわらず、弱いチームではあるが、一試合のうちの一セットぐらいはとれるチームになった。なんとか勝てる試合もあった。

隆広は、というと、だれにも内緒にするように、静かに上達していた。

トスは、高く遠くまで上げることができるようになった。腕をヒョイと振って、ミスをしていたレシーブは、腕を伸ばして的確にボールを拾えるようになった。なによりも、サーブは、低い軌道を与

がく力強いボールが、相手コートに飛ぶようになった。

最初は、サーブボールを空振りしないようにと祈っていたことなどウソのようだ。試合で、隆広  
が、ピンチサーバーとしてでてきても、安心してみていることができる。

七月の地区大会を最後に、隆広たち三年生は引退することになる。自分で選んだバレー部を、最後  
まで続けることができたのだ。

最後の試合で、出番があってもなくても、隆広は、さわやかにほほ笑んで、バレー部を引退するの  
にちがいない。